

無住と南宋代成立典籍

小林直樹

はじめに

寿福寺や東福寺といった禅林で学んだ無住の周辺には、入宋経験のある僧も少なくなかったであろう。米沢本『沙石集』^①巻七第三条「正直ニシテ宝ヲ得タル事」は、冒頭「近比帰朝ノ僧ノ説トテ、或人語りシハ」として、宋国のある「正直」な夫婦の挿話を語っている。

貧しい夫婦は餅を売って生計を立てていたが、ある日、夫が銀の軟挺が六つ入った袋を拾う。妻の勧めで夫は落とし主を探し、ようやくのことで見つけ出す。喜んだ落とし主は、当初、軟挺の半分を御礼に夫婦に渡そうとするが、たちまち心変わりし、あまつさえ「七つあったはずなのに、六つしかない」ということは、一つ隠しているのではないか」と言いがかりを付ける。双方、言い争ううち、ついに国の守の裁定を仰ぐことになった。国の守は目の確かな人物で、餅売りの妻からも事情を聞くと、夫婦を「正直ノ者」と確信し、六つの軟挺をそのまま夫婦に取らせ、落とし主には七つある軟挺を別途探すよう裁定を下した。「宋朝ノ人、イミジキ成敗トゾ、アマネクホメノ、シ」ったという。「正直」を基準に鮮やかな裁定を下した、いわゆる大岡裁きを語る説話である。

本話は、無住が帰朝僧から直接耳にした話ではなく、「或人」を介

した伝聞ではあるけれども、当時南宋で語られていた新しい話題に無住が接し得た背景に、禅林という修学環境が関与している可能性は高い。このように、帰朝僧から直接、間接に南宋の話題を耳にしうる立場にあった無住であるが、もちろん入宋僧が将来した典籍から得られた知見の量はその比ではなかったであろう。無住ゆかりの禅林の経蔵には、南宋代に成立した新しい典籍も少なからず含まれていたはずで、すでに南宋の圭堂編『新編仏法大明録』について「無住の同書閲読の可能性」^②が荒木浩氏によって指摘されているところである。

本稿では、そうした研究動向を承け、無住の著作における従来出典が明らかにされていない説話記事と南宋代成立典籍との関係について考察をめぐらすことにしたい。

一 禅林宝訓

米沢本『沙石集』巻七第二条「正直之俗士事」は、先に見た正直な夫婦の挿話の一つ前に位置する説話である。

唐ノ育王山ノ僧二人、布施ヲアラソイテ、カマビスシカリケレバ、其寺ノ長老、大覚連和尚、此僧ヲ恥シメテ云ク、「或俗、他人ノ銀ヲ百兩アツカリテ置タリケルニ、彼主死シテ後、其子ニ是ヲアタフ。子、是ヲ不取。『ヲヤ、既ニアタヘズシテ、ソコニヨ

セタリ。ソレノ物ナルベシ」ト云。彼ノ俗、『我ハ只アヅカリタバカリナリ。譲得タルニハアラズ。親ノ物ハ子ノ物トコソナルベケレ』トテ、又返シツ。互ニ争ヒテ不_レ取。ハテニハ官ノ庁ニテ判断ヲ乞ニ、『共ニ賢人也』ト。『云所アタレリ。スベカラク寺ニ寄テ、亡者ノ菩提ヲタスケヨ』ト判ズ。此事マノアタリ見聞シ事也。世俗塵勞ノ俗士ナヲ利養ヲムサボラズ。割愛出家ノ沙門トシテ世財ヲ争ハン」トテ、法々任セテ、寺ヲ追出シテケリ。

阿育王山の長老、大覚連和尚が、世財を争う僧僧たちに、百兩の銀を譲り合つて公の裁定を仰いだ「正直」な俗人の例を語って訓戒する話。当話は、南宋の浄善重撰『禪林宝訓』巻一所載の以下の記事に依拠するものと思われる。

明教曰、「大覚連和尚住育王」。因一僧争施利不_レ已、主事莫能断。大覚呼至、責之曰、「昔包公判开封。民有自陳、「以白金百兩寄我者亡矣。今還其家、其子不_レ受。望公召其子還之」。公嘆異、即召其子語之。其子辞曰、「先父存日、無白金私寄他室」。二人固讓久之。公不_レ得已責。付在城寺觀修冥福、以薦亡者。予目觀其事。且塵勞中人、尚能疎財慕義如此。爾為仏弟子不_レ識廉恥若是」。遂依叢林法擯之。〔西湖広記〕

『禪林宝訓』では明教（仏日契嵩）の語った挿話となつてるところを、無住はその外枠をはずし、さらに二人の俗人と判事とのやりとりも、『沙石集』に類話の多い、最後に裁定を仰ぐかたちに変更するなど、全体に柔軟な和訳ぶりがある。

出典となつた『禪林宝訓』は「宋代先徳の語録や伝記中から参禅修

道者の訓誡策励となるべき語句・機縁約三百篇の抄出編集であり、各篇ごとに出土を明示するという特長がみられる」書物だが、お茶の水図書館蔵寶堂文庫に五山版が蔵され、その巻末には次のような刊記が見える。

此書有補於叢林久矣。然本朝未有刊行。輒募衆縁鉅梓畢工。今將此板捨入建長禪寺正統庵。広印流通。不惟伝揚古徳之先言往行。而古倫亦有少酬夙志。云弘亥中夏幹縁古倫誌。

これによれば、「無学祖元の法嗣である古倫慧文の募縁により」、弘安十年（一二八七）、建長寺正統庵で開版されたものと知られるが、冒頭に「此書有補於叢林久矣」とあるところからすれば、本書は刊行の久しい以前から禪林に蔵されていたものとおぼしい。さらに、無住が学んだ東福寺開山、円爾将來の典籍を核として成る『普門院経論章疏語録儒書等目錄』に「禪門宝訓二部」と見える点からも、無住が本書を披覧していた可能性は高いと言えよう。

ちなみに、米沢本『沙石集』巻七には、正直、孝、忠、貞、礼といった徳目に関する説話が並び、本話はその正直を主題とする説話群の中に位置している。稿者はかつてこれらの徳目を『御成敗式目』の理念を支える武家道徳と関連づけて考察したことがあるが、孝、忠、貞、礼という儒教的徳目に対し、正直はやや色合いが異なる側面をもつ。だが、「正直・無私なるありようは、私同士の紛争を裁定する公権力に要請される、政道の正しさを支える理念であ」り、その点で武士社会にとってはやはり重要な徳目であると言えるのである。『沙石集』巻七の正直を主題とする説話に裁判・裁定に関わる話題が目立つのも

このことと関係しよう。ここでは、正直という徳目を担う話の素材として『禪林宝訓』という禅籍が用いられている点に、この時代の禅と武士道徳との交渉が垣間見えるように興味深い。

二 智覚禅師伝

さて、「開山ノ風情、宗鏡録ノ意也」〔『雑談集』卷三「愚老述懐」〕と記すように、無住が師の東福寺開山、円爾とのゆかりで智覚禅師延寿の『宗鏡録』を愛読したことはよく知られている。おそらくそのためであろう、無住は著者である延寿の伝記にも少なからぬ関心を払っている様子がうかがえる。まず、『聖財集』下巻に収載される延寿伝を挙げよう。

一 智覚禅師、上智者禅院サグリ作二一一心禅寂ノ闍ヲ、
二二曰ニ誦経万善莊嚴浄土ノ闍ヲ。遂ニ精ニ禱シテ仏祖ニ、信シテ手ニ拈ス之ヲ。七度並ニ得テ万善生浄土ノ闍ヲ。禅観ノ中ニ見テ観音ヲ、
以テ甘露灌ニ于ニ口ニ。従レ此ニ発ス観音ヲ弁ヲ。徒衆常ニ二千。日課ニ一百八事。学者参問、指シテ心ヲ為レ要ト、以テ悟ヲ為レ決ト。日暮ニ往ニ別峰ニ、行道念誦、云々。朝ニ放生シ夕ニ施餓鬼ヲ。毎日ノ所作、法華一部誦誦。一期ニ一万三千部。別録ニ有レ之ヲ。

智覚禅師が闍を引いて浄土業を選択したり、禅観の中で観音弁を獲得したりする挿話を語るが、実は、これとほぼ同内容の記事が阿岸本『沙石集』⁽¹⁴⁾卷四裏書にも載る。

裏書追註之 禅師念仏下

智覚禅師伝云、上ニ智上ニ禅院サグリ作二一一心ニ禅寂ノ闍ヲ。一ニ曰ク、一心禅寂闍、

二ニ曰ク、誦経万善莊嚴浄土ノ闍。遂ニ精ニ禱シテ仏祖ニ、信シテ手ニ招シテ之ヲ。

乃至七度、得テ誦経万善ヲ生カニ浄土ニ闍ヲ。禅観ノ中ニ観音ヲ以テ甘露ヲ灌ニ于ニ口ニ。従レ此ニ発ス観音ヲ弁ヲ。徒衆常ニ二千。日課ニ一百八事。学者参問、指シテ心ヲ為レ宗ト、以テ悟ヲ為レ決ト。日暮ニ往ニ別峰ニ、行道念佛。略抄。日課ニ云ハ日所作ナリ。誦法華二万部ト別伝ニ云ハ。上品上生往生人ト新修往生伝ニ見タリ。宗鏡録一百卷集レ之ヲ。一代肝要ナリ。閻魔王、禅師ノ影像ヲ被レ礼シテ之ヲ。〔第一下云云〕。……

以上のうち、『聖財集』で「云々」、阿岸本『沙石集』で「略抄」とそれぞれ記される直前までの記事はほぼ同文であるが、両者の出典は、南宋の宗曉撰『楽邦文類』⁽¹⁶⁾（一二〇〇年成立）卷三の以下の記事に求められる。

大宋永明智覚禅師伝

師諱延寿。……因思夙有二願一。一願終身常誦法華。二願畢生弘利群品。憶ニ此二願一、復樂禅寂進退遲疑、莫能自決。遂ニ上ニ智者禅院サグリ作二一一心ニ禅定ノ闍ヲ、二二曰ニ誦経万善莊嚴浄土ノ闍ヲ。冥心自期曰「儻於此二途、有二功行必成者、須三七返拈著為証」。遂ニ精ニ禱シテ仏祖ニ、信シテ手ニ拈ス之ヲ。乃至七度、並得ニ誦経万善生浄土ノ闍ヲ。由レ此ニ一意專修浄業、遂振錫金華天柱峰、誦経三載、禅観中見テ観音ヲ以テ甘露灌ニ于ニ口ニ。従レ此ニ発ス観音ヲ弁ヲ。初住雪竇山、晚詔住永明寺。徒衆常ニ二千、日課ニ一百八事。学者参問、指シテ心ヲ為レ宗ト、以テ悟ヲ為レ決ト。日暮ニ往ニ別峰ニ行道念佛。旁人聞山中螺貝天樂之声。忠懿王嘆曰、「自古求西方者、未有如此之切也。遂為立西方香嚴殿、以成師志」。至大宋開寶八年二月二十六日、晨起焚香告衆、跏趺而逝。

前章で見た『禪林宝訓』の挿話に対する和訳姿勢とはまったく異なり、

ここでは「略抄」とされるごとく、『樂邦文類』の傍線部を抄録するかたちでまとめられている。ちなみに、『樂邦文類』五巻は「浄土〔樂邦〕」に関する資料〔文類〕を意図的に集めた中国浄土教唯一の類聚で、後の中国浄土典籍に大きな影響を与えた⁽¹⁷⁾。書物である。著者宗曉は天台僧であるが、「延寿を高く評価し」、その伝記とともに延寿の著『万善同帰集』中の弥陀浄土思想の目立つ六問答（第二八―三三）を『樂邦文類』に収載した。その結果、「延寿は唯心の弥陀浄土思想家としての評価が定着し、今日に及んでいる」とされる。延寿を敬愛し、「念仏門ノ人モ心地ノ修行ヲウトクスベカラズ。禪門真言ノ人モ念仏ノ行ヲカコムベカラズ」（古活字本『沙石集』巻一〇第二条「臨終目出僧事」）と禪浄双修の立場を受容する無住にとっては、当然関心をそえられる対象であつたに違いない。『普門院経論章疏語録儒書等目錄』には「樂邦文類六冊」と見えており、無住が同書を披見する環境にあつたことは確かである。

一方、『聖財集』で「別録有之」として引かれる波線部の記述は、北宋の永安道原撰『景德伝燈録』巻二六の延寿伝に依っている可能性が高い。

杭州慧日永明寺智覚禪師延寿。……夜施鬼神食、朝放諸生類不可称算。六時散華行道、余力念法華經一万三千部。著宗鏡錄一百卷。詩偈賦詠凡千万言。……

さらに、阿岸本『沙石集』には「新修往生伝二見タリ」として引用される「上品上生往生人」との記事も含まれる。この記事との関係で注意されるのは、流布本系『沙石集』の巻一〇「臨終目出僧事」に語られる延寿伝である。いま、古活字本の本文によって示そう。

智覚禪師、坐禪ノホカノ行、法華ヲ誦シ、念仏ヲ行ジ、上品上生ノ往生セル人ナリシ。往生伝ニコレアリ。或僧、智覚禪師ノ没後ニ永明寺ニ来テ、カノ禪師ノ真影ヲ礼ス。ソノユヘヲカタリケルハ、「病ニヨリテ死シテ閻魔王宮ヘユク。炎王、僧ノ影ヲ図シテ礼拜シ給。冥官ニ問ニ、答云、『カレハ唐ノ永明寺延寿禪師ノ影也。人死シテ必中有ヲ経。炎王コレヲシリ、生所ヲ判ズ。シカルニ、中有ヲヘズ、炎王ニシラズシテ、直ニ上品上生ノ往生ヲトゲ給ヘリ。コレニヨリテ、王フカクコレヲウヤマフ』トイヘリ。蘇生シテ来テ影ヲ礼ス」トカタリキ。

これに相当する伝は、阿岸本『沙石集』の出典注記が示すように、確かに北宋の王古撰『新修浄土往生伝』⁽²⁰⁾（一〇八四年成立）下巻に見えている。

廿七、杭州恵日永明寺智覚禪師延寿、……没後数年、有僧結囊、訪師所居寺并真塔之所在。勤奉瞻礼、数日不已。問之、答曰、「某名契光、撫州人也。素不知師名。昨因疾死、至陰府。見所司殿宇、若王者居、閱文籍曰、『汝未当死。速返。遣人護送之。仰觀殿間、掛画僧像。王焚香頂拜。乃問獄吏、「此何人。王奉之勤。』吏曰、「凡人之生死、無不由此者。唯此一人、不經于此。王欲識之、乃画其像。」是杭州永明寺寿禪師也。今已西方九品上生矣。自釈迦滅度已来、此方九品上生、方第二人。（人下一本有「王所以三字」）奉之之勤耳。某既得生、昼夜思想聖人真身塔骨之難遇、是以不遠千里而來耳。問撫州僧者、法名志全。其人雖已老、今淨慈長老円照禪師、親見之問之、如所伝云。

これによれば、無住は『新修浄土往生伝』の本文をかなり簡略化しながら傍線部を中心に和訳しているように見える。だが、延寿の伝は『新修浄土往生伝』の後を承けて書かれた、南宋の王日休撰『龍舒浄土文』(一一六〇年成立)巻五にも次のように収載されているのである。

国初永明寿禪師

禪師名延寿。本丹陽人。後遷余杭。少誦法華經。……精進以修西方。既坐化。焚畢為一塔。有僧每日遶塔禮拜。人間其故。僧云、「我撫州僧也。因病至陰府、命未尽放還。見殿角有僧画像一軸。閻羅王自來頂拜。我問、「此僧何人」。主吏云、「此杭州永明寺壽禪師也。凡人死者皆經此處」。唯此一人不經此處」。已於西方極樂世界上品上生。王敬其入故、画像供養」。我聞之故、特發心來此遶塔作拜。以此見、精修西方者為陰府所重。

『新修浄土往生伝』と『龍舒浄土文』の本文を『沙石集』のそれと比較してみると、『沙石集』の簡略化があたかも『龍舒浄土文』の本文に沿うようなかたちでなされているのを見出すであろう。とりわけ僧の問いかけに対する冥官の言葉が『龍舒浄土文』との親和性が高いように見受けられる。もちろん阿岸本『沙石集』が『新修往生伝二見タリ』と記すところからすれば、無住が『新修浄土往生伝』を披見していた蓋然性はひとまず高いと見るべきであろう。しかしながら、無住の延寿に対する旺盛な関心から、さらに新たな伝へと食指が動き、『龍舒浄土文』を繙いたという事態も十分に考えられるのではなからうか。流布本の『沙石集』で出典注記が『新修往生伝』ではなく『往

生伝』となっているのも、あるいはこのことと関わるかもしれない。⁽²⁴⁾ちなみに該書の著者、王日休の伝は、先に触れた無住披見の書、宗曉撰『樂邦文類』の巻三に所載、「龍舒浄土文」の序跋は同じく巻二に収録されている。⁽²⁵⁾『普門院経論章疏語録儒書等目錄』に記載がないことから断定的なことは言えないが、無住が『龍舒浄土文』を繙読した可能性についても考慮に入れておく必要がある。⁽²⁶⁾

三 法華経顯応録

見てきたように、延寿の伝に強い関心を持ち、複数の文献を渉獵したとおぼしい無住であるが、もう一本、披見が確實視される書物がある。『樂邦文類』と同じく、南宋の宗曉撰『法華経顯応録』(一一九八年成立)二巻である。本書は「法華経の受持による靈驗・利益などを宣伝している仏教説話集」であるが、その下巻所載の延寿伝後半部を以下に掲げよう。

杭州智覚禪師

師諱延寿。……因思三願。一願終身常誦法華。二願畢生弘利群品。憶此二願、復樂禪寂、莫能自決。遂作三願。一曰一心禪定、一曰誦経万善莊嚴。於此二途、有二功成者、須三七返拈著。遂精禱仏祖、信手拈之、乃七番並得誦経万善圖。由是一意專修浄業、遂往天柱峰、誦経三載、禪觀中見觀音以甘露灌于口。從此發觀音弁才。初住雪竇、後選永明。衆至三千人。時号弥勒下生。勤大精進、日行一百八事。平生誦法華經一万三千許部。著宗鏡録百巻、勸入大藏。至大宋開寶中、示疾焚香告衆、跏趺而寂。

同じ著者の手になるものだけに、『樂邦文類』の延寿伝と重なる点が多いが、波線部「平生誦法華經一萬三千許部」相當部は該書になく、『聖財集』の対応箇所「毎日所作、法華一部誦誦。一期一萬三千部」は、『景德伝燈録』の「余力念法華經一萬三千部」よりは「法華經顯應録」との親近性が高いと認められる。もっともこれだけではあまりに微細にすぎ、影響關係を云々するには適切でないかもしれない。そこで、この箇所とも関連を有する『雜談集』卷七「法華事」の以下の記事を取り上げてみよう。

達磨大師弟子、尼惣持者、二十年ノ間、山中ニシテ十萬部誦誦シテ、肉身不朽シテ、數百年ノ後、舌根ヨリ蓮華一莖生タリト、伝ノ中ニ見タリ。智覺禪師、一萬三千部誦誦セリト、見タリ。

達磨の弟子「尼惣持」なる人物の法華經誦誦に関する靈驗譚だが、「伝」に取材したとされるこの説話は、ほかならぬ『法華經顯應録』下巻の以下の記事に依拠するものと思われる。

湖州蹟禪師

尼諱道蹟、号総持。不知何許人。得法於菩提達磨、考之伝燈。達磨不契梁帝。遂往少林。面壁九年。一日告衆曰、「吾欲西返天竺。汝等盍各言其所得」。時道育曰、「如我所見、不執文字、不離文字、而為道用」。師曰、「汝得吾皮」。尼総持曰、「我今所解、如慶喜見阿闍伽國。一見更不再見」。師曰、「汝得吾肉」。道副曰、「四大本空、五陰非有。而我見處、無有一法」。師曰、「汝得吾骨」。慧可礼拜依位而立。師曰、「汝得吾髓」。達磨遂以法付慧可而起家焉。蹟既未階於得髓。而履踐之志未忘。即遁居湖州下嶺之

頂峰。一。晝夜誦法華經、滿十萬部。幾二十年不下山。後歸寂。塔全身於結廬之所。至大同元年塔內忽有青蓮華一朵。道俗異之。因啓看見、尼肉身不壞、其華從舌根生。又於中獲蓮經一部。州郡録奏表奏、勅置法華寺。是寺至今大宋改額觀音院。則以法華名山。尼之塔猶存。淳熙中住持僧淨然重立祖堂以奉香火。題石記云。

『雜談集』は傍線部を中心に節略しつつ記事をまとめている。ならば、その後につづく「智覺禪師、一萬三千部誦誦セリト、見タリ」の部分も同じ「伝」、すなわち『法華經顯應録』の先掲延寿伝に取材したと考えるのがもっとも自然であろう。したがって、前章で取り上げた『聖財集』所載の延寿伝は、『樂邦文類』を基本としながらも、少なくとも『景德伝燈録』と『法華經顯應録』の両書を参照して構成されたものと考えられるのである。

さて、『雜談集』卷七「法華事」は、先引、尼惣持と智覺禪師の逸話のすぐ後に、「昔ノ伝記ニ畜類マデ聞之、得益アル事、不可勝計。和漢ノ伝ニ少々釈之」として、次のような説話を語っている。

唐朝二法志上人ト云ケル、山中ニ独住シ、朝夕誦法華。雉常二聞之。中ニ一雉、庵ノ中ニ入テ死了ヌ。夢ニ童一人来テ云、「我ハ雉也。聞經ノ故ニ畜類ノ業ツキテ、此ノ山ノ麓ノ家ノ子ト生ルベシ。七歳ト云ハン時ヨリ御弟子トシテ法華經ヲシヘ給ヘ。左ノ脇ノ下ニ雉ノ毛三莖有ベキ。コレソノ体ナルベシ」ト見ヘタリ。悉ク夢ニタガハズ、七歳ノ時經ヲシフルニ、本ヨリ習ヘルガ如シ。其名ヲ曇翼法師ト云ケル。後ニ德タケテ飛雲大師ト云テ、其山ノ第二世ノ祖師ナリケル。

或時、ワカキ女人、色アル衣裳キテ、籠ニ藏入レ、又猪子一ツ、蒜ニ茎入レテ、晚景ニ「寺ニ宿セン」ト云フ。機嫌ヲ思テ、カタク辞シテ不_レ許。女人泣_テ云ク、「里ハ下ラバ、定テ虎ノタメニ命ウスベシ。僧ハ慈悲ヲ本トス。イカゞ助給ハザラム」ト云。ヤム事ナクシテ、穩便ノ所ニコレヲ、ク。夜陰ニ腹ヲヤミテ、苦痛忍カネテ、サケビケリ。葉ヲ与フルニ、弥増ス。「我が腹臍ノ辺ヲナデサスリテタベ」ト云ニ、「大僧也。女人ニ手フルベカラズ」ト云テ、錫杖ノ柄、手巾ヲマキテ、ハルカニサ、ヘタリケル。去程ニ、アケボノニミレバ、女人ハ普賢菩薩、猪子ハ白象、蒜ハ蓮華也ケリ。象ニ乘リ、蓮華ヲ踏、雲ニ乗テ空ヘ上リ給。「汝ガ心ヲミルニ、水中ノ月ノ如キ。不_レ久シテ我が眷屬トナルベシ」トノ給テ去給ケリ。

法志上人のもとで熱心に法華經を聴聞した雉が、死後転生して、曇翼法師となり、女人に変化して戒力を試みようとした普賢菩薩から高く評価され、その眷屬となることを許される話。本話も出典は『法華經顯応録』上巻の以下の記事に求められる。

余杭志禅师

東晋時有僧法志。結庵余杭山、誦法華經、朝夕不懈。有雉、巢于庵之側。每聞誦經聲、則翔集于座傍、若待立聽受狀。如是者七年、一日憔悴。師撫之曰、「汝雖羽族而能聽經。苟脫業軀、必生人道」。明旦遽殞。師即瘞之。及夜方偃寐、童子再拜曰、「我即雉也。因聽師誦經、得脫羽類」。今生于山前王氏家、為男子。右腋猶有雉毳、見可驗也。僧詰朝至其家、問之果然。王氏一日設齋、志方踵門。此子遽

然曰、「我和尚來也」。拳衆異之、携以示志。志撫之曰、「此我雉兒耳」。遂解衣周視其腋下、果有雉毳三茎。「至七歲、宜聽出家」。父母唯之。至時入山、十六落髮。以腋有毳命名曇翼。授与蓮經不遺一字。志師歸寂、翼即為此山第二祖矣。

天衣飛雲大師

師諱曇翼、氏族先因已見前篇。既為僧、已隨方問道。初詣廬山、依遠法師、了悟宗乘。統入闕中、礼觀羅什。講誡經論、通達無礙得大弁才。後与同學曇字、東游会稽。因抵秦望山別業、五峰雙潤、氣象雄勝。因伐石誅茆、為住山計。專誦法華、僅于一紀。一日將嚙、有一女子。身披彩服、手携筠籠、内有白象一隻大蒜兩根。立於師前、泣而言曰、「妾山前某氏女。入山采薇路逢猛虎、奔遁至此。日已夕、草木陰翳、豺狼縱橫、歸無生理。敢託一宿可乎。師称嫌疑、堅卻不從。女則兩淚哀鳴。師不得已讓以草牀、即蒙頂誦經。至于三更、号呼疾作、称腹痛痛、覲師視之。師投以藥。女子痛益甚、叫不絕聲、曰、「儻得師為我案摩臍腹間、庶得少安。不然即死。仏法以慈悲方便為本。師忍坐觀、不引手見救耶」。師曰、「吾大戒僧。摩娑女身、此何理也」。懇求之切、即以巾布裹錫杖頭、遙以案摩。斯須告云、「已不_レ必矣」。翌晨女出庭際、以彩服化祥雲、交變白象、蒜化雙蓮。女子足躡蓮華、跨象、乘雲而謂師曰、「我普賢菩薩也。以汝不_レ久当歸我衆、特來相試觀汝心中、如水中月。不_レ可汙染」。言訖縹緲而去。爾時天上雨華、地

皆震動、郷人聞見莫不称歎。是日太守孟公覲方晨起視事、忽見南方祥雲氤氲光射庭際、而雲下隱隱有金石糸竹之音。訪問得師普賢示化狀、遂併師之道行聞于朝廷。即奉勅建寺、額号「法華」。(即今天衣寺是。)時普安帝義熙十三年也。師享寿七十、円寂此山。寺僧即真身而加塑焉。歷唐武廢教、衆以其像藏于寺南樹腹中、得不毀。吳越国武肅王特謚「飛雲大師」云。(師事迹傳珠林皆紀之。天衣又有「本伝実録」。所異同「処謹詳而録之。)

『法華經顯應録』では「余杭志禪師」(法志)と「天衣飛雲大師」(曇翼)の連続して配置されている二人の伝記を、『雑談集』は傍線部の記述に基づきながら和訳し、まとめて一話として語っている。生まれたびかりの曇翼の体にある前生の名残の羽毛の位置が、『法華經顯應録』では「右腋」とあるところ、『雑談集』では「左ノ脇」となっている箇所など気になる点はあるが、おそらく版本しか現存しないという『雑談集』のテキストの問題に帰せられる側面が大きいためであろう。

ちなみに、宋代守倫の手になる法華經注釈書『法華經科註』(普賢菩薩勸発品)にも「引事証」として同話が引用されており、そこでは『雑談集』同様、二人の挿話を一話として語っているが、語り口や表現においては『雑談集』とやや距離があり、『法華經顯應録』の典故としての位置は揺るがないものと思われる。⁽³⁰⁾

さらにもう一話、『雑談集』巻九「仏法二世ノ益并二逆修ノ事」所載の説話を挙げよう。

漢土ニ、仏法スベテ信ゼズ、僧ナドヲモ悪ミソシル惡人有ル所ニ、ワカキ女人ノ優ナル、流浪人トヲボエテ、ミエケル。人ノ

心ヲカケテ、カタラヒ聞ケルニ、「我ハタノムカタモナクシテ、ウカレタル身也。アハレミヤシナフ人アラバ、タノムベシ。タビシ、富貴種姓才覚只形ヲ思ハヌ、利根ニシテ、経ナドドク誦セン人ヲ憑ベシ」ト云テ、「観音品ヲ一夜ニ誦スル人ヲ憑ベシ」ト云ケレバ、我々トヲボエケル。二十人ヲボエタリケリ。「身一人シテ、イカゞ二十人ヲ夫ニスベキ。金剛經ヲ一夜ニヲボエム人ヲ憑ムベシ」ト云ケルニ、馬郎ト云ケル者、三日ニヲボエタリケリ。「君、大利根聰敏ノ人ニテヲハシケリ。タノミタテマツルベシ」ト云テ、日ドリナンドシテ、旧里ヘ帰テ、約束ノ日来レリ。悦思フホドニ、「身ニワツラヒアリ。イタハリテ、相見セン」ト云ケレバ、便宜ノ所ニテ、葉ナド用ケレドモ、ヤガテ大事ニ成テ、息タエニケリ。モシヤト思程ニ、膀胱シ、臭爛シケレバ、トカク云ニヲヨバズシテ、葬シテ埋テケリ。

其後、日数ヘテ、紫ノ僧伽梨ノ袈裟キテ、錫杖ツキタル僧、来テ、「カ、ル女人ヤミエシ」ト問フ。コトノ子細カタリケレバ、カノ墓所ヘ行テ、錫杖ノ柄ニテ、ホリヲコシテ見レバ、骨ハ金ノ鏤也。錫杖ノエニカケテ、河ニテ洗テ、説法シケル。人多クアツマリテ、聴聞シケルニ、「コレハ観音菩薩ノ、汝ガ生死ノ無常モ、因果ノコトハリ、シラズ、ヨロカニシテ、仏法ノタエナル道モ、シラザル事ヲアハレミテ、方便シテヲハシマシタルヨシ」大方、心モヲヨバズ、目出説法シ給ケレバ、諸人、随喜渴仰シ、菩提心ヲヲコシケル。サテ、空ヘ飛デ去給ヒケリ。伝ニハ、コレマデ見ヘタリ。……馬郎婦ト云テ、古人ミナ此事頌ニモ作レリ。

観音の化身である女(馬郎婦)が、方便を用いて、無信心な男(馬郎)

やその地域の人々を信仰の世界に導こうとする話。本話も『法華経願
應録』下巻の以下の記事に拠るものと思われる。

陝右馬郎婦

馬郎婦不知_レ出處。大唐隆盛_レ弘教。而陝右俗習_レ騎射蔑聞_レ三寶之名。婦憫其愚、乃之_レ其所。人見少女風韻_レ單子、欲乞_レ爲_レ養。女曰、「我無_レ父母。亦欲_レ有_レ婦。然不好_レ世財。但聰明賢善人能誦_レ仏經、則願_レ事_レ之」。男子衆皆聚觀。女即授_レ与普門品、「若能一夕通_レ此則歸_レ之」。至翌日誦徹者二十余輩。女曰、「女子一身、家世貞潔、無_レ以_レ二体事_レ多人_レ也。可_レ更別誦」。因授以_レ金剛般若。至旦背者十數。女更授_レ与法華經七軸、約三日通_レ之。至期独馬氏子能徹。女曰、「君既能過_レ衆人、可_レ白_レ父母具_レ媒娉_レ進_レ礼然後成_レ姻」。及馬氏以_レ礼迎_レ之、女將_レ至門、且曰、「適以_レ應接_レ体中少不_レ佳。願求_レ別室俟_レ安与_レ君相見」。因頓之_レ他房。筵客未_レ散。而女命終、已而壞爛。乃卜_レ葬之。未數日有_レ僧紫伽黎黎貌_レ古野。來尋_レ女子。馬氏引至_レ葬所。僧即以_レ錫撥_レ開沙土、見_レ屍已化唯金鎖骨存_レ焉。僧取就_レ河浴洗挑_レ於錫上、謂_レ衆曰、「此聖者憫_レ汝等不_レ信_レ正法、方便誘化_レ当思_レ善因免_レ墮_レ苦海」。忽然陵_レ空而去。衆見悲泣、瞻礼不_レ已。自爾一境奉_レ仏誦經、由_レ女之力_レ也。〔釈氏編辛録〕山谷道人観音贊曰、「設欲_レ真見_レ觀世音、金沙灘頭馬郎婦。又平江万寿体禪師頌曰、「十分美貌誰家女、百倍聰明是馬郎。堪笑金沙灘畔_レ約_レ始終姻娉_レ不_レ成_レ双」。

『雑談集』の傍線部では、金剛経を「一夜」で覚えた人と結婚しようという女の言葉に対し、馬郎が「三日」で覚えたという矛盾した記述

がなされるが、出典の『法華経願應録』を確認すると、女の出す經典の暗誦課題が、観音経から金剛般若経、さらに法華経へと順次引き上げられていく、その肝心の法華経の部分を語り落としていることが判明する。無住がそうした誤りを犯すとは考えにくいことから、ここも『雑談集』のテキストの問題に起因する現象と見ておきたい。

一方、『雑談集』の二重傍線部では、僧が女の正体を「観音菩薩」と明かしているが、出典では「聖者」とするのみで観音とは語っていない。無住は、出典の末尾に付された「山谷道人観音贊」⁽³¹⁾の内容から、馬郎婦の正体が観音であると読み取り、僧の言葉の中でその旨を表明させたものであろう。ちなみに、南宋の祖秀撰『興隆仏法編年通論』⁽³²⁾（一六四四年成立）巻二にも『法華経願應録』との同話が収められるが、末尾の贊頌の部分がないため、当該話だけからは馬郎婦が観音の化身であるとの情報が導けない。また、同じく南宋の志磐撰『仏祖統紀』巻四一（一二六九年成立）にも同話が認められるが、こちらはやや記述が簡略で、馬郎婦の正体も「普賢聖者」であるとされるなど、『雑談集』との距離が大きい。こうした点からも、本話の出典が『法華経願應録』であることはまず動かないと思われる。

さらにもう一点、『雑談集』の末尾の波線部で無住が「馬郎婦ト云テ、古人ミナ此事頌ニモ作レリ」と述べるところを問題にしておこう。こは、おそらく『法華経願應録』のやはり波線部の贊頌に基づいて記述したものと一応は考えることができるが、あるいはそれによらずとも、無住がこうした知識を持っていた可能性も否定できない。実際、馬郎婦説話は中国の禪林においては馴染みの話柄であったとおぼしい。澤田瑞穂氏は「けだし「金沙灘頭馬郎婦」の一句は、いつのこ

ろからか禅林の一套語となつていたものであろう。……南宋から元代になると、馬郎婦や魚籃観音は古仏祖の一として急激に禅匠の語録を賑わすようになる。それはたいいてい語録中の仏祖讃の部に収められている」として、多くの具体例を列挙している。また、パトリシア・フィスター氏も「宋元時代の馬郎婦の絵の多くに禅僧による賛文が書き添えられているところを見ると、馬郎婦が禅の語りにおいて確固としたテーマとして確立されていたことは明らかである」と指摘している。無住が婦朝僧を介してこうした話題に接し得た可能性は十分にある。いや、そもそも、馬郎婦の話は日本の禅林における儀礼の場においても語られていた徴証がある。東福寺円爾と同じ無準師範門下の来朝僧、蘭溪道隆の手になる『大覚禪師福山五講式』⁽³⁴⁾観音講式第四には以下の説話が見えている。

昔震旦北地有「豪家」。其名馬郎。即自「幼不信三宝」。以「貪欲為先」。一日有「少婦」從其門而過。雖「不」穢嚴容貌極美。手持「法華妙典」誦誦不已。音聲清徹令「人」樂聞。馬郎一見、心念紛紛。遂請入宅中待之以礼。徐徐問曰、「婦子從何而來還。有夫否。手執之卷、是何典乎」。婦答曰、「妾惟一身不曾嫁事。所持之軸乃法華經」。馬郎平生雖惡仏書然、愛欲之念極深。又問云、「誦此經典、欲何求歟」。婦云、「若有「人能誦誦此經者」、妾以身而任之」。馬郎密喜而謂曰、「某甲專心授此經、若誦誦之時、汝肯嫁予否」。婦云、「若果、豈虛語哉」。馬郎朝夕繫念不満足五十日、皆誦誦此經。遂遣使報娘子曰、「某甲已誦通法華」。不知何日可為「和合耶」。婦云、「但定三月十八日、可下轎馬來迎」。至日遣人到彼

宅迎之。娘子乘輿至半途、將渡金沙灘、其輿若干鈞之重。雖「加人而力不可」舉。遂報馬郎、即躬自至輿所。揚其簾視之、惟見「金鎖骨」一。座上題云、「某乃觀音化身也。蓋馬郎溺於愛欲之海、不肯回頭。故以此大乘輿典、令啓信心、捨邪歸正。可謂寶常映水、人徒望之、花木無心、蝶自忙耳」。自後馬郎誦法華經之外、常念觀音名号。其子孫相承、迨今繁衍不絶。若人至心持誦、利益無窮。各誦「伽陀」可行「禮拜」。

仰啓觀音妙智力 世間苦惱尽消除

若人識意称名号 福德無窮等太虛

南無一心婦命頂礼大慈大悲觀世音菩薩

同じ馬郎婦の話とはいえ、先に見た『法華経顕應録』などのものとは、細部においてかなりの相違がある。まず、女は最初から馬郎を相手と見定めてその家を訪れており、したがって候補者を絞る必要もないから、観音経や金剛般若経は登場せず、暗誦すべきは法華経に限定される。結婚式の当日、馬郎の宅に向かう女を乗せた輿が「金沙灘」を渡ろうとすると、突然重みを増してまったく動かなくなる。知らせを受けた馬郎が現場に到着し、輿の簾を上げてみると、そこには「金鎖骨」が一つあるのみだった。その傍らには女の手で、自分は観音の化身であり、信心のない馬郎を愛欲の海から救うための方便としてかく振る舞った由が記されていた。以後、馬郎は法華経を誦するのみならず、常に観音の名号を念じ、それは子孫に受け継がれ、現在にも及んでいるとされる。

建保五年（一二二七）頃の渡宋が推定されている慶政撰『閑居友』⁽³⁶⁾

下巻第五話には、「唐土に侍し時、聞き侍しは、愚かなる男の一人侍けるが、法花経を読まむとするに、⁽⁸⁾ゑ叶はず侍ければ、いみじく容姿よき女の、いつくよりともなくて来たりて、妻となりて添ひ居て、ねんごろに教へて、一部終りて後、観音の容姿に現はれて、失せ給ゑる事ありけり」という短い伝承が記されており、当時、南宋においてはさまざまな形態の馬郎婦説話が語られていたものと想像される。『大覚禪師福山五講式』中の説話は、禪僧の賛頌によりこまれる「金沙灘」の地が一話の要の部分に登場する点から見て、実際に南宋の禅林で語られていた説話に近い形態のものではないかと推測されるのである。

ともあれ無住は『法華経顕应録』中の、少なくとも五話（杭州智覚禪師「湖州蹟禪師」「余杭志禪師」「天衣飛雲大師」「陝右馬郎婦」）に取材した可能性が高い。享保十二年（一七二七）に本書を我が国で開版した江戸寛永寺の僧、亮典は「刻法華経顕应録序」において「宋石芝曉法師有『顕应録』二卷。……嘗伝本邦而久悶僻地。余偶訪獲而読之、乃欲梓刻広布、……」と記しており、これを受けて、李銘敬氏も「……『顕应録』の場合、東叡沙門亮典が指摘しているように、本邦に伝わったものの、久しく僻地に隠されてしまったためか、日本でのその受容と影響はあまり見られていない」とする。⁽³⁸⁾本書の辿ったこうした享受史の中で、無住による撰取は注目すべきものであろう。無住が『法華経顕应録』に関心を惹かれた理由は、一つには法華経を「多年読誦シ」（『雑談集』巻七「法華事」）ていたという厚い信仰によるものであろうが、いま一つは『楽邦文類』同様、撰者宗曉の智覚禪師延寿尊重の姿勢に関わるであろう。次に掲げるのは『法華経顕应録』序の冒頭部である。

昔永明智覚禪師以「大弁才」著「賦五首」。謂華嚴感通、金剛証驗、法華靈瑞、観音現神、神棲安養。其所下以齋、懺聖教、鼓舞群機、可謂有「大功於像運」矣。然賦所「由作」特以「歌詠讚揚」為事。至「於事蹟始末」非「伝記」不能周知。故華嚴則有「感応伝」、金剛則有「感験録」、法華則有「靈瑞集」、観音則有「感応集」、浄土則有「往生伝」……

宗曉は本書編纂の経緯を「賦五首」を著した延寿の事蹟の称揚から起筆しているのである。さらに、無住が本書に取材した話柄を参照すれば、延寿、達磨の弟子「尼揔持（総持）」、馬郎婦と、その大半が背後に禅的文脈を読み取れるものであった。『普門院経論章疏語録儒書等目錄』に『法華経顕应録』の名は見出せないが、無住の本書披見の背景にはやはり禅的環境を想定するのが自然なように思われるのである。⁽⁴⁰⁾

四 大蔵一覽集

南宋代に成立した典籍で無住の著作との関係が気になるものとして、他に陳実編の仏教類書『大蔵一覽集』⁽⁴¹⁾がある。本書については、近年、湯谷祐三氏が『私聚百因縁集』や西晉聖聡の著作への影響を指摘し、さらに上野麻美氏が聖聡『大経直談要註記』や『金言類聚抄』への影響関係を明らかにするなど、浄土系の僧による活用状況を中心に注目されている。とはいえ、椎名宏雄氏によれば本書は「禅籍の範疇に入る文献であり、その「底流」には、大蔵経の真意を宗眼をもって正伝し、大陸各地に分派流通させたのが禅門である、という主張が流れているのである。いうところの「教禅一致思想」であり、『宗鏡録』の意図をより明確な構成で示そうとしたダイジェスト版といってもよいであ

ろう」とされるなど、いかにも無住が関心を示しそうな書物なのである。現に無住自身、その法系に連なる東西も『興禪護国論』で本書を引用している事実が知られ、また、『善門院経論章疏語録儒書等目錄』にも「大蔵一覽十巻」とその名が認められることから、無住は本書を繙読できる環境にあったと推測される。

本書と無住との関係につき、最近新たな知見を提供したのが、筒井早苗氏である。氏は、江戸中期の日蓮宗の僧、日寛の『臨終用心抄』の『沙石集』享受に触れる中で、同書が『沙石集』からの引用箇所を典拠として「大蔵一覽」を挙げている箇所を紹介している。『臨終用心抄』の当該記事に導かれて確認すると、流布本系『沙石集』巻四「頸縊上人事」の次の記事など確かに両者の関係が窺えそうな部分である。古活字本の本文によって示そう。

善人モ惡念ヲオコシテ惡趣ニ入ル。阿耨陀王トイヒシ国王、善人ニテオハシケルガ、臨終ノ時、看病ノ者、扇ヲカホニオトシカク。コレニヨリテ、瞋恚ヲオコシテ、死シテ大蛇ニ生テ、迦旃延ニアヒテ、コノヨシヲ語リケリ。一生五戒ヲ持セル優婆塞、臨終ニ妻ヲアハレム愛習アリケルガ、妻ガ鼻ノ中ニ虫ニムマレタリケル。コレモ聖者ニアヒテコレヲシレリ。

善人であった阿耨陀王が臨終の際、看病の者に顔に扇を落とされ、瞋恚を起こしたために大蛇に転生する話と、五戒を持した在俗信者が臨終時に妻への慕情を抱いたがために妻の鼻の中の虫に転生する話とを連続して語る。この箇所が『大蔵一覽集』巻五の次の記事と対応する。

雜譬喻經云、昔有沙門行草間。見大蛇言、「和尚聞阿耨達王否」。答曰、「聞」。蛇曰、「我是也」。沙門言、「阿耨達王立仏

塔寺供養功德巍巍。当生天上。何縁乃爾」。蛇言、「我臨終時、迦人持扇墮我面上、令我瞋恚、受是蛇身」。沙門即為説經、一心樂聽不食七日、命過生天。却後數月持花散仏。衆人怪之。在虛空曰、「我阿耨達王。蒙沙門恩聞法生天。今來謝耳」。臨終時人不護病者心也。〔寫字函第三卷〕

経律異相云、有清信士、持戒精進。因疾困苦。婦大悲苦、「我何所依。子何所怙」。夫聞愛恋、大命將至。魂神即還在婦鼻中、化作一虫。婦哭不止。時因道人往見其婦、虫從鼻出。婦方脚踏。道人告曰、「莫殺。是卿夫媚化作此虫」。婦曰、「我夫奉経持戒。何縁作此」。道人曰、「過起愛恋今生為虫」。道人為虫説法。卿既持戒。福心生天。但坐恩愛、墮此虫中」。虫聞意解。命終生天。〔傍字函第七卷〕

『大蔵一覽集』の本文は原拠の「雜譬喻經」や「経律異相」を節略化して引用しているが、『沙石集』の説話がさらに簡略な語り口であるため、本文の比較によって遠近を云々することはむづかしい。だが、阿耨陀王と在俗信者の話が連続して配置されるという両者の共通点は見逃せないものであろう。ただし、『沙石集』の前者の説話では大蛇に転生した阿耨陀王の話し相手を釈迦十大弟子の一人「迦旃延」としており、『大蔵一覽集』の「沙門」（原拠の「雜譬喻經」も同様）との開きはやや大きい。柔軟な和訳姿勢は無住の持ち味ではあるが、直接関係を言うには若干躊躇われるものがないではない。とはいえ『沙石集』の当該記事の淵源に『大蔵一覽集』が位置する可能性は十分にある。

無住の著作における『大蔵一覽集』との共通話は特に『雜談集』に

目立つ。だが、この場合も直接的な影響関係を特定することは実はなかなかむづかしい。一例を挙げよう。『雑談集』巻五「天運之事」には、波斯匿王の娘の善光が乞食と結婚させられながら富裕となる話、中国のある役人が冥界の役人も兼任していたため、上司である大臣の翌日の食事内容を言い当てたという話、さらに生前釈迦像造立の願を立てていた法慶なる人物が、死後冥界に行くも、蘇生して造立の願を果たす話の三話が連続して語られており、それらはいずれも『大蔵一覽集』に同話が認められる。『大蔵一覽集』との同話が三話まとまって存在しているとすれば、両者に何らかの関係が認められそうにも思える。だが、このうち最初の善光の説話と三番目の法慶の説話について言えば、ともに『大蔵一覽集』巻四に同話が収載されるものの、⁽⁵⁰⁾該話はそれぞれ「雜宝藏經」、「法苑珠林」を原拠としており、『雑談集』の説話は本文関係の点では、『大蔵一覽集』とその原拠とどちらに近いとも判断できないのである。二番目の中国の役人の説話は、従来「出典不明」とされているもののゆえ、⁽⁵¹⁾ここで取り上げてみよう。

漢土、大臣ノ召仕ル、官人、昼寝シテ、主ノ召ニ不參。次日、子細ヲ問ニ、冥官ニ召仕ハル、ヨシヲ答フ。「何事ニ被仕」ト問エバ、「三品以上ノ食ノ沙汰ヲ仕ル」ト云。「サラバ、我明日ノ食、勘ヘヨ」ト云。一紙ニ書テ、「封ヲ後ニ御覽ゼヨ」ト云フ。次日、日、王ニ被召、食スギテ、瀉藥ヲ以テ下テ、小橋皮湯服シタリケル。日記ニスコシキモタガハザリケリ。

本話の同話は『大蔵一覽集』巻五に認められる。

宗鏡云。昔韓公混之在中書也、嘗召二吏、不_レ時而至。怒將_レ罪之。吏曰、「某別有所屬」。不_レ得_レ遽至。公曰、「宰相之吏

更屬何人」。吏曰、「某不幸兼屬陰官」。公謂_レ不_レ誠怒曰、「既屬陰司、有何所主」。吏曰、「某主三品已上食料」。公曰、「若然、某明日當以何食」。吏曰、「此雖細事、不可顯言」。乞_レ疏於紙、過後爲_レ驗。乃如_レ之而繫_レ其吏。明旦遽有_レ詔命。既對適遇_レ進_レ食糕饌一器。上以其半賜_レ公。公食_レ之美。又以賜_レ之。既退腹脹。歸_レ于私第、召_レ医視_レ、曰、「食物所壅。宜服_レ少橋皮湯」。至_レ夜可_レ飲漿水。明旦疾愈。思_レ前吏言_レ召_レ之。視_レ其書云、「明晨相公只食_レ一釘半糕饌橋皮湯一盞漿水一甌」。皆如其言。公復問、「人間之食皆有_レ籍耶」。答曰、「三品已上日支。五品已上、有_レ權者旬支、無_レ則月支。凡六品至_レ一命、皆季支。其不_レ食_レ祿者年支」。故知、飲啄有_レ分、豐儉無_レ差。所謂玉食錦袍、鶉衣藜藿、席門金屋、千駟一瓢、皆因最初一念而造。心跡纔現、果報難_レ逃。以過去善惡爲_レ因、現今苦樂爲_レ果。必然之理也。〔策字函第一卷〕

『雑談集』は原話の前半三分の二ほどの記述を大幅に簡略化しながら語っているが、たとえば官人が「昼寝シテ」に相当する部分は原話にはなく、無住が想像をふくらませながら和訳している部分であろう。だが、『雑談集』が『大蔵一覽集』に依拠したかといえ、そうとは言えない。出典注記に「宗鏡云」とある通り、『大蔵一覽集』の原拠は「宗鏡録」巻七一の以下の記事に求められる。

如_レ前定録云。昔韓公混之在中書也、嘗召二吏、不_レ時而至。怒將_レ鞭之。吏曰、「某別有所屬」。不_レ得_レ遽至。晋公曰、「宰相之吏更屬何人」。吏曰、「某不幸兼屬陰官」。晋公以爲_レ不_レ誠怒曰、「既屬陰司、有何所主」。吏曰、「某所主三品已上食料」。

晋公曰、「若然某明日当以何食」。吏曰、「此雖細事不可顯言」。乞疏於紙過後爲驗。乃如之而繫其吏。明旦遽有詔命。既對適遇太官進食糕糜一器。上以其半賜晋公。晋公食之美。又以賜之。既退而腹脹。歸于私第召医視之曰、「食物所壅。宜服少橘皮湯。至夜可飲漿水」。明旦疾愈。思前吏言召之。視其書云、「明晨相公只食一釘半糕糜橘皮湯一碗漿水一甌」。則皆如其言。公固復問、「人間之食皆有籍耶」。答曰、「三品已上日支。五品已上、有權者旬支、無則月支。凡六品至一命皆季支。其不食祿者年支耳」。故知、飲啄有分豐儉無差。所謂玉食錦袍鶉衣藜藿席門金屋千餽一瓢、皆因最初一念而造。心跡纔現、果報難逃。以過去善惡爲因。現今苦樂爲果。糸毫匪濫。孰能免之。猶響之応、声影之隨、形。此必然之理也。

『雑談集』の本話を『大蔵一覽集』と『宗鏡録』の当該話と比較しても、本文上どちらが近いか判断することはできない。だが、『雑談集』には他にも『宗鏡録』に依拠する説話の記事が存在しており、それらの記事は『大蔵一覽集』には収載されていないから、本話についてもやはり出典は『宗鏡録』と判断せざるをえないのである。⁽⁵⁵⁾

とはいえ、もちろん善光や法慶の説話については、依然として『大蔵一覽集』に依拠した可能性も十分に残っていると見えよう。このようなわけで、無住の著作に『大蔵一覽集』の典拠箇所を確定することはなかなか困難であるけれども、そこに上野麻美氏のいわゆる同書の「影」が随所に認められることだけは間違いないのである。⁽⁵⁷⁾

五 如々居士語録

無住が関わりをもった南宋代成立典籍として、最後に触れておきたいのは『如々居士語録』である。その名は『雑談集』巻八「持律坐禪事」の以下の記事に見える。

唐国ニモ、昔、山ノ中ニ独住ノ僧有ケリ。常ニ坐禪シケルヲ、猿ドモヲホク見ナレテ、僧ノ白地ニ他行ノ時、僧伽梨衣ヲカケテ、坐禪ヲ学シケル。其ノ中ニ猿五疋、得法シタリケル。五獼猴ノ塔ト名テ、五ノ塔ヲ立タリ。今ニ有レ之ト云ヘリ。如々居士ノ録ノ中ニ有レ之。

如々居士は「大慧宗杲（一〇八九—一一六三）の弟子、可庵慧然の法嗣である」とされ、その語録としては、京都大学附属図書館蔵の写本『如々居士語録』三冊と、同じく京大附属図書館谷村文庫と建仁寺両足院に蔵される刊本『重刊増広如々居士三教大全語録』一冊の存在が知られる。うち京大蔵の写本について、椎名宏雄氏は次のように述べている。⁽⁵⁸⁾

まず、京大本『如々居士語録』は、三冊から成り、奥書や識語等は存しないが、室町期の古写本と推定される。……他に異本の知られぬ天下唯一本として貴重である。京大本の特徴は、甲集より庚集におよぶ全七集となつている点にある。しかもそれは、語録の題名・編者名・序文、などの相違や存否により、少なくとも四回にわたつて編集されたとみられる語録類を集大成している。すなわち、まず甲集と乙集は、紹熙五年（一一九四）に謝師稷の序文をもち、この年に刊行された語録とみられる。……次の丙

集と丁集は、「三教語録」とされ、「住獅子峯參学小師僧慧進」の編者名がみられるから、別個の編集なことが知られる。……また、戊集と己集は「増入丹霞先生語録」とされるから、前記の甲乙、または丙丁の、いずれかに対する増入編集である。……次に、庚集の「坐化語録」は「別集」ともされ、嘉定五年（一二二二）に兪聞中の序文が付けられることから、文字通り別個に編集刊行されたことのある語録とみられる。……これが刊行されたのかいなかは不明であるが、あたかも、東福寺の『普門院経論章疏語録儒書等目錄』中には、関字函中に、「如々居士語 三冊 又 一冊」とみえ、また、光字函中には、「如々居士語 七冊」とある。つまり、鎌倉期には、如々居士に関する何種かの語録が将来されていたのである。就中、七冊本は京大の七集三冊本と対応するものであろう。（傍点原文のまま）

一方、刊本の『重刊増広如々居士三教大全語録』については、氏は明初・洪武一九年（一三八六）の刊行であることを明らかにし、「七集本『語録』の粹といつてよい」部分に「新たに……二門を増広したものであろう」と推定している⁽⁶⁰⁾。

ところが、『雑談集』に語られる得法した猿の挿話は写本、刊本のいずれにも見出せないのである。この場合、二つの可能性が考えられよう。一つは、椎名氏が『普門院経論章疏語録儒書等目錄』の記載内容から「鎌倉期には、如々居士に関する何種かの語録が将来されていたのである」とするように、無住が披見した「如々居士ノ録」は現存するものとは別の編集形態のものだったという可能性。もう一つは、無住の単純な記憶違いによるという可能性である。実際、同じ逸話は

「南宋の本覚編『歴代編年釈氏通鑑』⁽⁶¹⁾（一二七〇序刊）卷一一にも認められる。

終南山一僧住庵習定。一日僧失伽梨。乃見猴披在岩宴坐。後見群猴皆習定間有坐脫者。今有五獼猴塔。宣宗有偈贊云、「嗟汝獼猴能入定。心猿不動幾千春。罷攀紅樹三冬果。休弄碧潭孤月輪。双眼已隨青嶂合。兩眉猶對百花顰。自從レ坐脫終南後。悟了浮生多少人」。

ただ無住が仮にこうした他書収載の伝承に拠りながら、不用意に「如々居士ノ録ノ中ニ有之」と記してしまつたにせよ、その場合でも「如々居士ノ録」を披見していた可能性は依然として高い。先にも触れたように、『普門院経論章疏語録儒書等目錄』には複数の「如々居士語録」についての記載があり、無住が本書を繙ける環境にあったことは間違いない。もとより無住の著作における『如々居士語録』の影響を精査した上で、結論づけるべき性格の事柄ではあるが、無住が本書を繙読した経験がなければ、記憶違いであっても「如々居士ノ録ノ中ニ有之」とは書けないだろうと予想されるからである。

ちなみに椎名宏雄氏は本書の享受に関し、次のように述べている。⁽⁶³⁾
かくして、如々居士の語録は、宋代に幾度かの編集・刊行の歴史を経て、明初にその粹が重刊されたことを知る。……しかし反面、本邦では、本語録は、わずかに金沢文庫に「初学坐禅法」などの古写本がみられ、無著の『禪林象器箋』に授用されるのを例外として、流布した形跡はさららない。

そうした極めて限定された流布状況の中で、無住が本書に触れ得た可能性が高いことは、やはり注目に値するであろう。

おわりに

本稿では無住の著作における説話的記事への南宋代成立典籍の影響を追ってみた。その結果、無住が取材した文献として、禪籍と並んで『楽邦文類』や『法華経顕応録』といった浄土色の強い宗暁の編者が浮かび上がってきた。しかしながら、すでに見たように、取り上げられる話柄には禅的背景が読み取れるものが多く、全体としては禅的環境の中での摂取が予想されるものであった。

一方、そうした文献の影響が認められる無住の著作に関しては、『雑談集』や『聖財集』という無住晩年の作に目立ち、『沙石集』でも流布本系の本文に該当箇所が多かった。無住が個々の南宋代成立典籍にどこで接したのか、特定することはむづかしいが、晩年の無住を考えると、やはり東福寺を中心とする禅林やそこでの人脈を第一に想定するのがもっとも自然であろう。⁽⁶⁴⁾ そうした中で、無住は『法華経顕応録』や『如々居士語録』のような日本での享受が極めて限定されていたかに見える典籍をも繙読する機会を持ち得たのである。

無住の著作、とりわけ『雑談集』や『聖財集』といった晩年の作は、入宋僧の将来した典籍とその講義という、当時の最新の情報知識によって花開いた成果という面が大きいと言えよう。本稿は説話的記事という限定した角度からではあったが、無住の著作のそうした側面に光を当てようとした。今後さらに幅広い角度からの考察により、無住の著作にうかがえる同時代の海彼世界との交流の相について探求をつけたい。

〈注〉

(1) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。句読点、濁点を施すなど、表記は私に改めた箇所がある。

(2) 荒木浩「無住と円爾——『宗鏡録』と『仏法大明録』の周辺——」『説話文学研究』第三五号(二〇〇〇年七月)。また、同「仏法大明録」と『真心要決』——『沙石集』『徒然草』の禅宗的環境をめぐって——『古代中世日本の内なる「禅」』(アジア遊学一四二)(勉誠出版、二〇一一年五月) 参照。

(3) 椎名宏雄「『禅家宝訓』諸版の系統」『印度学仏教学研究』第四四卷第一号(一九九五年十二月)によれば、「本書はもと大慧宗杲と竹庵士珪とが江西の雲門庵で編集し、これを東呉の沙門淨善が淳熙年間(一一七四―一一八九)に大幅に増補改編したものである」。ちなみに、本書は「禅門宝訓」(「禅門宝訓集」)とも称される。

(4) 大正新修大藏経第四八巻¹⁰¹⁶c¹⁰¹⁷a。なお、本稿における大藏経類の引用に際しては、字体は通行のものに改め、返り点は私に付した。また、割注は「」で示すなど、表記上、手を加えた箇所がある。

(5) 注3椎名氏前掲論文。

(6) 川瀬一馬『五山版の研究上・下』(日本古書籍商協会、一九七〇年) 参照。なお、成實堂文庫本の内題は「禅門宝訓集」。

(7) 注3椎名氏前掲論文。

(8) 今枝愛眞『普門院藏書目録』と『元亨釈書』最古の写本——大道一以の筆蹟をめぐって——『田山方南先生 華甲記念論文』

集』（一九六三年）所載の影印・翻刻による。なお、今枝氏は本目録について、大道一以が普門院に住した文和二年（一三五三）に円爾の将来目録である『三教典籍目録』に基づいて作成したものに、さらに後人の手が加わったものと推定しており、「円爾請来とおぼしきものはことごとく大道自筆の部分に含まれてゐる」とする。

(9) 拙稿『沙石集』における徳目——北条政権との関わり——
『人文研究』第五七卷（二〇〇六年三月）。

(10) 菅野覚明「武士の倫理と政治——中世の「道理」をめぐる——」
『日本思想史講座2——中世』（ぺりかん社、二〇一二年）。
なお、伊東玉美「無住の正直——正直覚書——」『無住研究と資料』（あるむ、二〇一一年）は、無住に至る「正直」観の系譜について論じている。

(11) 拙稿「無住と武家新制——『沙石集』無住記事の分析から——」
『無住研究と資料』（あるむ、二〇一一年）では、『沙石集』巻七の徳目説話群に北条時頼時代の武家倫理が強化された社会的雰囲気（ケイ）が反映している可能性を指摘したが、時頼の儒教道徳と禅との関わりについては、海老名尚「北条得宗家の禅宗受容とその意義」『北海史論』第二〇号（二〇〇〇年一月）の以下の指摘が参考になる。

「無住」をベースとした時頼のあるべき政道が、儒教的政道論のうえに構築されていたことは先に触れた。そうだとすれば、時頼が為政者としての資質を「徳」・「仁」・「義」といった儒教的徳目に求めたことは想像に難くない。しかし、ある

べき政道の実現を至上命題として課されていた時頼にとって、そうした儒教的徳目が知識・教養としてではなく、それが彼自身に身体化される必要があった。そうした時頼の欲求に応えたのが、禅宗（宋朝鮮）であった。

(12) 古典資料（寛永二十一年版本影印）により、表記等私に手を加えた。

(13) 東北大学附属図書館狩野文庫本（同マイクロフィルム）による。句読点、濁点を施すなど、表記は私に手を加えた箇所がある。

(14) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。句読点、濁点を施すなど、表記は私に手を加えた箇所がある。

(15) 土屋有里子『沙石集』諸本の成立と展開（笠間書院、二〇一一年）第三章「阿岸本の考察」第三節「阿岸本裏書集成」参照。
なお、土屋氏は阿岸本について「永仁改訂以前の本文に、時に浄土宗的な独自文、表現を加え、米沢本に次ぐ古さと豊かな情報を持つことは明らかである」と認定する。

(16) 大正新修大蔵経第四七巻195a b。

(17) 柴田泰「中国浄土教における唯心浄土思想の研究」『札幌大谷短期大学紀要』第二二号（一九九〇年三月）。

(18) 柴田泰「中国浄土教における唯心浄土思想の研究（二）」『札幌大谷短期大学紀要』第二六号（一九九四年三月）。

(19) 注17柴田氏前掲論文。柴田氏は延寿の著作の分析から「少ない」と云え、延寿は主な浄土教典籍を読んでおり、西方有相の弥陀浄土思想は正確に理解していた」としつつも「延寿はそれ以上に天台・華嚴系典籍の引証で唯心の諸仏・諸仏浄土を強調し、弥陀

とその浄土は十方諸仏の一仏一浄土にすぎないとする。そして、西方有相の弥陀色身を観ずる行は中下根の人と考える。」「彼はあくまで唯心浄土を志向し、西方有相の弥陀浄土は認めてはいるが、積極的に主張していない」と指摘し、にもかかわらず、その延寿が「唯心の弥陀浄土思想家」として喧伝されるようになるのは、宗曉撰『楽邦文類』のフィルターを通して以降のことであると結論する。無住は『聖財集』の当該箇所を少し前で以下のように記しており、延寿の浄土思想に関する無住の理解も、宗曉のフィルターを通してのものであった可能性をうかがわせる。

一 禪師ノ浄土門修行スル有_レ之。浄土ノ法門ハ三部経ノミナラズ。起信論、智論等ニ其説アリ。大乘ノ信心ヲ退シメザラン為ニ専ラ願ベシト見ヘタリ。惠遠等ノ大乘ノ師、観心坐禪同ク行ジテ、浄土ノ行ヲ修ス。普賢文殊、極樂ノ往生ヲ願ヒ、天台智覚等ノ大禪師、皆願求ス。愚痴ノ族ノミ行ズベシト思ヘル輩、代ニアリ。誤也。……当_レ知、浄土ノ中ニハ極樂ヲ願ベシト云事、諸教ノ所_レ讚多ク在_レ弥陀ト云ヘル、誠ニ可_レ然_ル。

(20) 深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引』影印編(勉誠社、一九八〇年)により、表記等私に手を加えた。

(21) 大正新修大蔵経第五一巻422a。ちなみに、阿岸本『沙石集』で「別伝_{ハ云々}」として引かれる「読法華二万部」の記事が何に基づくかは未詳。

(22) 続浄土宗全書による。

(23) 大正新修大蔵経第四七巻268b c。なお、「現存の大正蔵経に所

蔵されている『龍舒増広浄土文』一二巻は、王日休の『龍舒浄土文』一〇巻が増広されたもので、一一巻には編者名は無く、一二巻は附録とあり、しかも王日休以降の人の語も編集されている。……巻一〇の末尾の大慧の跋までが、王日休の撰述本の最初の刊行と考えてよいであろう」とする石井修道氏の説(「大慧禪における禪と念仏の問題」『禪と念仏——その現代的意義』大蔵出版、一九八三年)に従いたい。ちなみに、法然門下の長西の手に成る『浄土依憑経論章疏目錄』(大日本仏教全書)には「龍舒浄土文十巻(九十丁)」と見える。

(24) ちなみに内閣文庫本や神宮文庫本では、当該箇所は「新往生伝」とする。土屋有里子『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』(笠間書院、二〇〇三年)、および注15土屋氏前掲書、第十章「神宮本の考察」参照。

(25) 李銘敬『「法華経顕応録」をめぐる』『海を渡る天台仏教』(勉誠出版、二〇〇八年)は、次章で取り上げる同じ宗曉の編著で、やはり無住の披見が確実視される『法華経顕応録』についても、「顕応録」「高僧」第一四八話「明州久法華」という一話は、『龍舒浄土文』巻第五から抄録して幾らかの改変を加えた短話である」と『龍舒浄土文』との影響関係を指摘している。

(26) 『新修浄土往生伝』や『龍舒浄土文』の本邦における受容は早く法然『選択本願念仏集』に認められ、その後、法然門下において本格化することが知られる(高尾義堅『宋代仏教史の研究』平楽寺書店、一九五二年。石田充之「親鸞聖人の宋代浄土教受容の意義」『龍谷大学論集』第三六五・三六六合併号、一九六〇年一

二月)。さらに、法然門下の著作上に認められる宋代浄土教典籍の背後には泉涌寺俊仍による将来本の存在が推定されている(石田充之「鎌倉浄土教と俊仍律師」『鎌倉仏教成立の研究 俊仍律師』法蔵館、一九七二年)。一方、最近、横内裕人氏は『新修浄土往生伝』の古写本に關して、大治三(五年)(一一二八(三〇))の書写になる国立国会図書館蔵本(高山寺旧蔵本)や保元三年(一一五八)、東大寺北院弁昭の書写になる東大寺蔵本の存在を紹介している(『中世南都の経蔵と新渡聖教』、説話文学会創設五十周年記念大会シンポジウム「説話と資料学——敦煌・南都・神祇——」二〇一二年六月)。無住がこうした浄土教典籍をどこで披見しえたか、その修学環境や人脈との関わりにおいて探求していく必要がある。なお、注39・40参照。ちなみに、近本謙介「遁世と兼学・兼修——無住における汎宗派的思考をめぐって——」『無住研究と資料』(あるむ、二〇一二年)は、『沙石集』における遁世と往生叙述との密接な関連について論じている。

(27) 大日本統蔵経所収。

(28) 注25李氏前掲論文。

(29) 大日本統蔵経所収。

(30) この他、同じく南宋の志磐撰『仏祖統紀』卷二六(大正新修大蔵経第四九卷)にも同話が認められるが、こちらはやや記述が簡略な上、法志と曇翼の挿話の語り順が逆転するなど、『雑談集』との距離が大きい。

(31) パトリシア・フィスター「馬郎婦の尊格化と近世日本の禅宗界および皇族間の馬郎婦信仰」『仏教美術と歴史文化(真鍋俊照博

士還暦記念論集)』(法蔵館、二〇〇五年)は、「黄山谷(庭堅、一〇四五—一一〇五)は「観世音賛六首」の第一首の最終行に、例の公案の語句「金沙灘頭馬郎婦」を組み入れている」と指摘している。

(32) 大日本統蔵経所収。

(33) 澤田瑞穂「魚籃観音——その話芸と文芸——」『仏教と中国文学』(国書刊行会、一九七五年、初出は一九五九年)。

(34) 注31フィスター氏前掲論文。なお、馬郎婦説話については、彌永信美『観音変容譚——仏教神話学Ⅱ』(法蔵館、二〇〇二年)も参照。

(35) 東京大学史料編纂所蔵の謄写本(文久三年(一八六三)書写本の謄写本。外題「大覚禪師福山五講式附録和文章」)による。翻刻に際しては通行の字体を使用し、返り点などは私に付した。ちなみに同書の識語には以下のように記されている。

夫因縁者仏家之至要也。時節若至、其理自彰。吾三間山首楞者幾乎。八百余載。木日三間寺。後勅号円通興国。今之開山諱宏弁、字若訥、初名成忍坊、革教寺為禪叢。時大覚禪師蘭溪大和尚東渡、首寓筑之博多円覚寺。禪師一日告衆曰、「今日有嘉賓、洒掃客舍」。衆不信而諾。若訥祖杖錫入円覚、与禪師相見。機縁相熟而累日矣。遂執興共俱回於吾山。使禪師居東堂。居一二年、囑法若訥祖、附以錫杖扠子剃刀。特製観音講式、羅漢講式、羅漢供、祭文、涅槃講式、舍利講式、達磨講式、幹縁文、若訥道号之説并偈、付与開祖。迄今吾山修此仏事。……

元文第二丁巳夷則念有四日

肥前州小城県

勅賜三間山円通興国禪寺住持小比丘

翠巖玄芝薰沐拜書

- 元文二年（一七七七）七月二十四日に肥前円通寺の翠巖玄芝が記すところでは、蘭溪道隆は来朝後、博多円覚寺に入って間もなく、円通寺に移り、該寺の開山若訥のために観音講式などを作り与えたものという。大部後世の記事ではあるが、もし事実を伝えるとすれば、蘭溪道隆は寛元四年（一二四六）に来朝し、京都泉涌寺来迎院に入る（『元亨釈書』）までのわずかの期間に、これらの講式類を作成したことになる。なお、本書については、高木宗監『建長寺史 開山大覚禪師伝』（大本山建長寺、一九八九年）参照。
- (36) 平林盛得「慶政上人伝考補遺」『国語と国文学』第三七卷第六号（一九七〇年六月）。

(37) 小島孝之他校注『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』（新日本古典文学大系）（岩波書店、一九九三年）による。

(38) 注25李氏前掲論文。

(39) 『普門院経論章疏語録儒書等目録』に収載される宗暁の著作としては、先に名前を挙げた『楽邦文類』のほか、別筆部分に「施食通覧」の名が見える。

(40) 東福寺円爾と浄土教との関連をめぐっては、原田宗司「入宋僧と浄土教——円爾を中心に——」『教学研究所紀要』第一一号（二〇〇五年三月）が、「円爾は宋より帰朝（一二四一）の際、数千巻もの内外典籍をもたらししたが、その中に宋代浄土教典籍とし

て、元照の『観経疏』・同『弥陀経疏』・戒度の『正観記』・同『扶新論』・知礼の『妙宗抄』・宗暁の『楽邦文類』等を将来したことがまず注目される。……また一以の『普門院録』（稿者注、『普門院経論章疏語録儒書等目録』）によれば、円爾の住持した東福寺には、その他にも浄土教典籍として、智顗の『浄土十疑論』一卷・同『阿弥陀経義記』一卷・憬興（或いは源信）の『阿弥陀経略記』一卷・道綽の『安樂集』二卷・善導の『転経行道願往生浄土法事讃』二卷・同『観念阿弥陀仏相海三昧功德法門』一卷・源信の『往生要集』三卷・永観の『往生十因』一卷・信瑞の『浄土三部経音義集』四卷等が収蔵されていた模様である。そして何よりも彼の業績として注目しなければならない点は、……円爾は『要道記』（稿者注、『十宗要道記』）「浄土宗」の条において、法然の『選択集』を指南書としつつ称名一行説を展開したことであり、また同時代の凝然等とは異なって、体制側に身を寄せながらも浄土宗を独立した一宗として認めたことであった」と両者の関係に注意を促している。『普門院経論章疏語録儒書等目録』に収載される書目が「円爾の請来した諸本のうちこの目録作成当時になお伝存したものがその主要部分を成したと考えられる」（和島芳男『日本宋学史の研究 増補版』吉川弘文館、一九八八年）とすれば、『法華経顕応録』の類も元来東福寺に蔵されていた可能性もないとは言えまい。一方、円爾門下には入宋僧も多く、中には「後に城北の栗棘庵に退隠したが、永仁四年栗棘庵所蔵書籍規定を制してゐるほどであるから、蔵書も多く、宋から将来した典籍も少くなかつたやうである」（木宮泰彦『日華文化交流史』富

山房、一九五五年）と推定される東福寺第四世白雲慧曉のような人物も含まれていた。慧曉は元泉涌寺僧であり、東福寺における浄土教典籍の問題は「泉涌寺僧との交流」（原田正俊「九条道家の東福寺と円爾」『季刊 日本思想史』第六八号、二〇〇六年四月）という観点からも考えてみる余地があるかもしれない。

- (41) 昭和法宝総目録第三卷（大正新修大蔵経別巻）所収。椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社、一九九三年）は、本書の成立について「わが江戸初期の寛永一九年（一六四二）に京都寺町の西田勝兵衛刊行本には、巻首に趙令鈴による紹興二十七年（一一五七）の序と陳実の自序が存在し、本書がこのころの成立であることが知られる」と指摘している。

- (42) 湯谷祐三『私聚百因縁集』と檀王法林寺蔵『枕中書』について『名古屋大学国語国文学』第八四号（一九九九年七月）。

- (43) 上野麻美「中世仏教説話にみる『大蔵一覽集』の影——『大経直談要註記』から『金言類聚抄』に及ぶ——」『国語国文』第七六巻第七号（二〇〇七年七月）。

- (44) 椎名宏雄「解題」『禅学典籍叢刊』第六巻上（臨川書店、二〇〇一年）。

- (45) 柳田聖山「采西と『興禅護国論』の課題」『中世禅林の思想』（日本思想大系）（岩波書店、一九七二年）。

- (46) 筒井早苗「無住と病——臨終行儀的視点から見た看取りを中心に——」『無住 研究と資料』（あるむ、二〇一一年）。

- (47) 昭和法宝総目録第三卷^{1331c}。

- (48) ちなみに、二話のうち後者の在俗信者の説話は、流布本系『沙

石集』巻八「先世房事」にも、次のようなややふくらみのある叙述をもったかたちで収載されている。

昔シ五戒ノ優婆塞アリケリ。アヒオモヘル妻ニ愛習ノコリケル故ニ、死テ後、妻ガ鼻ノ中ノ虫ニムマル。妻、鼻ヲカミテ、虫ノアルヲ見テ、フミコロサントス。時ニ聖者アリテ、是ヲ見テ、「汝ガ夫也。ユメノコロスベカラズ。」トイフ。妻ガ云、「我夫ハ持戒修善ノ者也。天ニ生ズベシ。ナンゾ虫トナラン。」トイフ。聖者ノイハク、「最後ノ妄念ツヨクシテ、先コノ生ヲ感ズ。」ヨテ法ヲ説クニ、虫死シテ天ニ生ズトイヘリ。（古活字本）

本話において、傍線部「鼻ヲカミテ」にあたる表現は『大蔵一覽集』（虫從鼻出）にも原拠の『経律異相』（虫從鼻涕、忽然墮地）にもなく、無住の創案によるものと考えられるが、二重傍線部「法ヲ説クニ」に該当する表現を比較すると、「説法」（『大蔵一覽集』）「説経」（『経律異相』）と、やや『大蔵一覽集』に近似する。

- (49) もっとも、無住が原拠にはない人名を補う場合がないわけではない。『雑談集』巻七「法華事」には「唐ノ法華伝ニ見タリ」と注記されるように「法華伝記」巻八第一二話に基づくとおぼしい説話を収めるが、原拠では単に「客僧」と記されるところを「行堅トテ貴キ上人……有リケリ」と固有名が補われる。なお、この箇所について山田昭全・三木紀人校注『雑談集』（三弥井書店・中世の文学、一九七三年）は「人名ではなくて、おそらく行業堅固の人という意であろう」とするが、文脈から判断してやはり人

名と見るべきであらう。

(50) 昭和法宝総目録第三卷 1320 b および 1317 a b。

(51) 注49前掲書。

(52) 昭和法宝総目録第三卷 1339 b c。

(53) 大正新修大藏經第四八卷 815 c 816 a。

(54) 一例を挙げれば、『雑談集』巻九「冥衆ノ仏法ヲ崇事」所収の以下の説話は、『宗鏡録』の後掲記事に依拠するものと思われる。

漢土ノ或山ノ中ニ、三論ノ講ヲ開テ、貴キ上人栖ケリ。谷へ遥ニ下テ水ヲ用ユル事、労有ル故ニ、他所へ移ラムト思テ、其用意シケル夜、其ノ山ノ神来テ、請ジテ云、「此処ニシテ大乘ヲ講讀シ給ヘ。小乗ヲ講ズルハ山ノ頂ニ水ノエガタキガ如シ。大乘ヲ講ズル処ハ光明眷屬福智等来リ会スルコト、大海ニ衆流ノ入ガ如シ。水ノタメナラバ、龍ヲ請ジテ此処ニ水易レ得カルベシ」ト云ケルガ、庵ノ辺ニ殊勝水流出テ、上人ノ存生ノ程有テ、彼後ニハ失ケリト云ヘリ。

『宗鏡録』巻九三（大正藏48巻921a）

唐釈慧璿姓薰氏、住襄陽。少出家聽三論。初住光福寺、居山頂引汲為勞。明欲往他寺。夜見神人身長一丈衣以紫袍。頂礼璿曰、「請住於此常講大乘經。勿以小乘為慮。其小乘者如高山無水、不能利人。大乘經者猶如大海。自止此山多仏出世。一人説誦説大乘、能令所在珍宝光明眷屬榮勝。若有小乘前事並失。唯願弘持勿孤所望。法師須水此易得耳。来月八日定當得之。自往劍南慈母山大泉、請龍王去也」。言已不現。恰

至来月七日夜、大風卒起從西南来、雷震雨霽、唯見清泉香而且美。合衆幸。及亡龍泉漸便乾竭。

なお、『雑談集』における当話の機能については、拙稿「無住の経文解釈と説話」『説話文学研究』第四八号（二〇一三年七月予定）参照。

(55) 同様なことは『大藏一覽集』と『景德伝燈録』との関係についても言える。たとえば『沙石集』巻一第八条の金神説話や卷三第一条の智嚴禪師説話は『大藏一覽集』に同話が認められる（昭和法宝総目録第三卷1402a・1401b、ともに原拠は『景德伝燈録』が、無住は『景德伝燈録』（大正新修大藏經第五一卷232c 233a・228b）に拠っていると判断される。

(56) 注43上野氏前掲論文。

(57) 『雑談集』巻三「乗戒緩急事」の祇陀太子と末利夫人の説話（1300c 1301a、原拠は「未曾有経」、巻五「呪願事」の慈童女説話（1319b、原拠は「雜宝藏経」、巻七「願行事」の天竺の霊像と賊人の説話（1317b、原拠は「西域記」）など。

(58) 椎名宏雄「宋元版禅籍研究（四）」——如々居士語録・三教大言語録——『印度学仏教学研究』第二九巻第二号（一九八一年三月）。

(59) 注58椎名氏前掲論文。

(60) 注58椎名氏前掲論文。

(61) 大日本統藏経所収。

(62) ただし、「如々居士語七冊」の記載は目録の別筆部分である。

(63) 注58椎名氏前掲論文。

(64) 注15土屋氏前掲書第六章「梵舜本の考察」第一節「増補本としての可能性」(初出は二〇〇五年)では、『雑談集』巻九「仏法盛衰事」に収められる、普門寺住持、本智房俊顕と無住の交流を語る記事から、無住晩年の典籍閲覧をめぐる「東福寺関連の人脉」
との関わりに注目している。

* 本稿執筆にあたり、貴重な資料の閲覧をご許可くださったお茶の水図書館成簀堂文庫、神宮文庫、京都大学附属図書館、東京大学史料編纂所に対し、心より御礼申し上げます。なお、本稿の一端は、二〇一一年度説話文学会二月例会シンポジウム「〈解釈〉される経典・経文——その動態と創造性——」(二月一七日、於京都女子大学)における報告「無住の経文解釈と説話」の中で触れるところがあった。また、本稿は学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)課題番号24520223)による研究成果の一部である。